

2011.8.10 夕刊

## 駆ける魂

ダブルスでは現代の名手の一人



プロ卓球選手 岸川 聖也 (24歳) ①

岸川聖也といえは、やはり「ダブルスがうまい」という卓球関係者が多い。2003年の世界ジュニア選手権では男子ダブルスで左利きの村守実と組んで初優勝。翌年の同大会では同じ左利きの水谷隼と組んで2年連続優勝を達成した。水谷とのペアは全日本選手権で08年度大会から4連覇も達成した。世界選手権でも09年横浜大会では水谷と組んで男子ダブルス銅メダル、今年のオランダ・ロッテルダム大会で福原愛とペアで混合ダブルス銅メダル。個人種目で2個のメダルは現役最多である。「なぜうまいのか」と聞くと「できないことがあまりないからかな」という。何でもできるオールラウンダーであることが条件なの

### 「苦手がない」複に生かす

か。男子ナショナルチーム監督の宮崎善仁はこう解説した。「ダブルスでまず重要なのはコース取り。2人が重なるようなコースに振られないようにしないといけない。それを避ける頭を十分に岸川は持っている。次にレシーブ。ダブルスはサーブをするコースが決まっておき、レシーブが大変重要になる。そのレシーブ技術が日本でも最高レベルにある。大きなフットワークはないけれど、両ハンドが自在に振れるから守備範囲をカバーできている。頭がいい、レシーブがうまい、両ハンドが振れる。この3つがポイントになっている」。「ダブルスは以前は右打ちと左打ちが組むことが常識だった。左右に分かれて、動く範囲を狭くすることができるところだ。ところが今や、右石でも1人がバック

### 福原とペアの相性良く

ハンドのレシーブ技術、強アになる。お互いがバックの横回転をかけて攻撃的にハンドでレシーブできるか、片方はバックハンド中りやすい。常に台の近くに心、片方はフォア中心で打ってラリーの主権を取り取るので、コンビとして成り立つようになった」。「逆にいえば右、左だと右の選手のバックハンド技術が使えない。だからバックハンドのチキータがうまい選手は右打ち、それができない選手は左と組んだ方がいい。岸川はすごいチキータの技術を持っているし、吉田海偉(フリー)、張一(東京アト)、松平健(早大)、丹羽孝希(青森山田高)の4人が候補だが、ここへきて世界ランクが、ここへきて世界ランクを10位から31位と一気に上げた丹羽が有力という。誰が相手でも岸川なら強力ベアに仕立ててくれそうだ。(敬称略)

次回「東京大リーグ」より変則ラバーのバックで取る人が多いのでいいます。